



記念館オープン特集

村田清風の生涯

(その2)

▲ 村田清風翁 (1783年～1855年)

前月号から引き続き「村田清風の生涯」の後編を掲載します。

四、天保の改革

天保七年(一八三七)、長州は暴風雨に襲われ、萩城下は大洪水となりました。その上藩主の不幸が続き、これらに要した費用のため財庫は困窮の極みに達しました。

このような状況下、天保八年(一八三六)に毛利敬親は第十三代藩主となり、長州藩の抜本的な藩政改革に取り組みこととなりました。敬親は中級武士であつた清風を一代家老の地位にまで抜擢し、藩政改革の任に当たらせました。この時、行われたのが「天保の大改革」であり、清風五才のときです。

この改革の大要は、財政の大改革として、負債八万貫返済のための儉約の徹底、士族の負債整理と士風の一新、殖産興業であります。また、軍備の拡張と充実のために江戸に武器庫の建設、萩においては、海岸防備等の訓練を行いました。さらに、教育の奨励として、江戸の藩校有備館の創設と萩の明倫館の拡張を行いました。また、清風自身も天保一四年(一八四三)に三隅山荘(旧宅)に尊聖堂を建て、私塾を開きました。

五、国歩艱難

しかし、儉約の徹底などこの

改革は、厳しく激しいものであつたので、清風に対する非難の

声も強まり、中には徒党を組んで萩平安古の役宅の門柱を斬りつけたり、投石したり、また夜間にまぎれて清風を刺そうとするものさえあらわれました。

清風はこのような当時の心境を、詩歌に次のように詠んでいます。

・国歩艱難策未成

国歩艱難策未成ならず

忘身聊献野芹誠

身を忘れて聊か献ず野芹の誠

・才疎萬事違人望

才疎くして萬事人望に違ひ

・徳薄多年負世情

徳薄くして多年世情に負く

・咬月門前誰砕石

咬月門前誰か石を砕き

・芳梅籬外渠極を剪る

芳梅籬外渠極を剪る

・撫松唯托千秋後

松を撫して唯托す千秋の後

・有問清風答我名

清風に問あらば我が名を答えよ

・身をば思わじ世の中の

誹れる人を おもいこそすれ

・病をおしての登城

清風はこうした、幾多の困難

にあいながらも、藩主敬親の厚

い信任もあつて清風は所信を貫

き、長年の弊害を取り除いて出

費を節約し、藩政は一新され士

気は大いに高められました。

弘化二年(一八四五)六三才

の時、清風は多くの業績を残し

ながら職を辞して三隅山荘に帰

り、隠居の身となりました。以後人材の育成に力を注ぎ、三隅山荘の尊聖堂は多くの子弟たちで満ち溢れました。

隠居後も、多くの人々が清風の教えを乞うために、三隅山荘を訪れる人が絶えませんでした。吉田松蔭もその一人です。嘉永元年(一八四八)再び藩主に乞われて、明倫館御用掛を命じられました。不幸にも中風にかかり、やむなく職を辞して、三隅山荘で静養することになりました。

安政二年(一八五五)、大いに政務改革を行うために、周布政之助の強い要望もあつて、清風は再度藩主に乞われて、病中のまま起用され密議にあずかることになりました。この時、清風は病中で不自由な体でありましたが、「藩主の恩命であれば」と、駕籠に乗って登城し、殿中で杖を使用することを許されました。特に清風のため、座敷近くに新しく便所まで設けられたといひます。

それから数日後のこと、中風の再発により城内平安古の役宅で逝去しました。行年七三才、



▲ 5月26日に行われた清風祭 (沢江)